

## 「荻窪の記憶」

こぼればなし

## 荻外荘と開戦記念日

荻外荘公園の開園式は、太平洋戦争の開戦記念日にあたる12月8日に行われるとのこと。区によれば、この日を選んだことに他意はないそうですが、「昭和史の舞台」としての因縁を感じます。



復元された荻外荘

いまから83年前の12月8日のことです。「帝国陸海軍は、本8日未明、西太平洋において、アメリカ・イギリス軍と戦闘状態に入れり……」。大本営発表の臨時ニュースをラジオで聞いた徳川夢声（天沼の住人）は、「あんまり物凄い戦果であるのでピッタリ来ない。（略）いくら万歳を叫んでも追っつかない」と感激。荻外荘の向かいに下宿していた作家・阿川弘之（当時、東大生）は「涙がぼろぼろ流れて」きたといいます。では、同じニュースを、荻外荘の主・近衛文麿は、どのように聞いたのでしょうか。

この日、第三次近衛内閣を総辞職して間もない近衛は、滞在していた箱根で開戦の報に接すると、驚愕するとともに怒りました。そして、彼には珍しいまでに狼狽して急ぎ帰京しました。この日、華族会館に近衛を訪ねた細川護貞は当時のことを次のように回想しています。

「周囲の人々は真珠湾の勝利にざわめいていたが、彼は浮かぬ顔をしていた。私が室に入っていくと、ゆっくり立上っ

て廊下に出て来て、『えらいことになった。僕は悲惨な敗北を実感する。こんな有様はせいぜい二、三カ月だろう』と沈鬱な声で言った。私はそのときの彼の様子を忘れることができない」。

（岡義武『近衛文麿～「運命」の政治家』による）

近衛の心境は、その2か月前、内閣総辞職に当って天皇に上奏した文からもうかがうことができます。「シナ事変の未だ解決せざる現在に於て更に前途の透見すべからざる大戦争に突入するが如きは、シナ事変勃発以来重大なる責任を痛感しつつ臣文麿の到底忍び難き所なり」。「シナ事変」とは、近衛の首相就任直後からはじまった日本と中国の戦争。和平交渉のチャンス逃すなど、近衛の対応のまずさが重なって出口なき戦争へと突き進み、中国を支援するアメリカが日本軍の撤退を要求して石油の輸出を止めるなどの圧力をかけてきたことから、日米の関係は一触即発の状態になりました。近衛は、なんとか外交交渉で解決しようとしませんが、陸軍は撤兵には絶対応じられないと主張。近衛の上奏文は、そうした状況のなかで、圧倒的に国力に差のあるアメリカとの戦争を回避できなかった自らのふがいなさを吐露したものとといえるでしょう。

終戦後、作家でジャーナリストだった菊池寛は、310万を超える犠牲者を出した太平洋・アジア戦争を「日清、日露の戦いとは異なり、しなくともすんだ戦争」といい、「政治を他人まかせにして置いたために、我々はひどい目にあつた」と書いています。まさに、その政治の舞台の一つであった荻外荘に宿る記憶は、戦争をめぐる世界が揺れ動くいま、私たちに多くのことを考えさせてくれるのではないのでしょうか。

荻窪地域区民センター協議会OB 松井和男